

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：32684

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K13857

研究課題名（和文）監視社会における秩序化の実践と身体的経験の変容

研究課題名（英文）The Structures of Discrimination and Violence in the Surveillance Society

研究代表者

高野 麻子（Takano, Asako）

明治薬科大学・薬学部・講師

研究者番号：90758434

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、身体管理に内在する暴力、とりわけ「未来を知るために個人を意味づける」行為に発生する統治の権力構造を明らかにすることで、監視社会論を歴史社会学的に考察することを大きな目標とした。これを達成するために、本研究では、文献・資料調査を中心に4つの作業（「監視社会の理論的変遷と技術的展開の整理」、「生体認証技術の誕生と優生思想の関係を明らかにすること」、「戦後日本の再編と身体管理の思想の整理」、「監視社会と新優生学的知の関係を明らかにすること」）を実施した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の大きな意義は、デジタルテクノロジーに依拠したデータによる監視の諸実践を現代社会の新たな課題として分析するのではなく、近代以降の身体管理の歴史のなかに位置づけることで、近代から現代に連続する課題と新たな課題の双方を明確にすることができる点である。社会が経験する「変化」や「転換」の内実とその構造を、歴史的連続性のなかで読み解いていく点に本研究の独創性がある。

研究成果の概要（英文）： This study aimed to examine the structures of discrimination and violence in various controls over human bodies and to present some valuable perspectives for considering the contemporary situation within a historical framework. In this research, it needed four steps to this end, to examine some theoretical and technological transitions in the surveillance society, to elucidate the relationship between identification technologies and eugenics, to examine various controls over human bodies in the post-World War II Japanese society, to clarify the relationship between the surveillance society and the new eugenics.

研究分野：社会学

キーワード：監視 生体認証技術 身体管理 データ化 優生思想

1. 研究開始当初の背景

博士課程と日本学術振興会特別研究員 PD の期間において、生体認証技術の草分け的存在である「指紋法」がイギリスの植民地インドで誕生し、これがイギリス帝国から日本帝国に伝播していく歴史の変遷を辿ることで、近代的統治における身体管理の特徴を考察した。

さらに、この研究成果をもとに、研究活動スタート支援では、研究課題を「監視社会における統治と身体管理の変容 生体認証技術の歴史社会学」と設定し、視点を現代へと移した。グローバル化が議論される時代に、なぜ指紋法を含む生体認証技術が世界的に普及しているのかについて考察を開始し、指紋法以外の統治の技法とその特徴を整理する作業、現代の多様化する生体認証技術の特徴と、それらが使用される場面や目的を整理する作業を行なった。視点を近代から現代へと移したことで、現代の身体管理の構造が複雑さを増していること、さらに身体管理の意味や経験に変化が生じていることが見えてきた。そこで、これまでの研究を踏まえて、歴史の変遷のもとで身体管理における新たな局面を明らかにするために、若手研究(B)への申請を行い、研究を開始した。

2. 研究の目的

本研究の目的は「1. 研究開始当初の背景」で述べたこれまでの研究をさらに発展させ、現代における身体管理の意味や経験に生じている変化を分析することである。現在、個人情報や日常の行動履歴から DNA データにまで及び、身体管理はより身体の内奥へと向かっているにもかかわらず、高度なコンピュータ技術に依拠することで身体的な経験は失われつつある。近年需要を伸ばしている顔認証システムは、登録・照合ともに装置と非接触で実行されるため、いつ登録され照合されたのかを知るすべがない。さらにこれらは利便性・効率性・セキュリティ維持で説明されるため、一連の身体管理に内在する暴力が不可視化してしまう。そのため、監視社会論を歴史社会学的に考察する道筋を描くことを大きな目標にするとともに、身体管理に内在する暴力、とりわけ「未来を知るために個人を意味づける」行為に発生する統治の権力構造を明らかにする。これによって、現代社会において合理化と秩序形成の実践が孕む暴力を把握し、抵抗の可能性を模索することにつながっていけると考えた。

3. 研究の方法

本研究の目的を達成するために、本研究期間内に次の3つの課題を設定した。すなわち、予測や予防といった未来を知ることが目的に「個人の身体に意味を付与する」実践の契機を、現代に特有の新規なものとして捉えるのではなく、国民国家形成や植民地統治さらに帝国形成における身体管理の思想や実践(とりわけ優生思想)のなかに見つけ出すこと、現代の監視社会が予測や予防の傾向を強めるなかで登場する「新優生学」の思想と最新の監視テクノロジーが目指す管理の関係性から、現代の秩序形成の特徴を描き出すこと、得られた結果を と比較することで、現代の身体管理における不可視化された暴力の所在を明らかにすること、である。

以上の ~ の課題を明らかにするために、文献・資料調査を中心に研究期間内で具体的に4つの作業(「監視社会の理論的変遷と技術的展開の整理」、「生体認証技術の誕生と優生思想の関係を明らかにすること」、「戦後日本の再編と身体管理の思想の整理」、「監視社会と新優生学的知の関係を明らかにすること」)を実施した。そのうえで、それぞれの作業で得られた結果を比較・参照することによって、本研究の目的である近代から現代に至る「身体を意味づける」ことで達成しようとする秩序化の実践とそこに内在する暴力を考察した。

4. 研究成果

本研究では、「3. 研究の方法」で述べた通り、4つの作業(「監視社会の理論的変遷と技術的展開の整理」、「生体認証技術の誕生と優生思想の関係を明らかにすること」、「戦後日本の再編と身体管理の思想の整理」、「監視社会と新優生学的知の関係を明らかにすること」)を実施した。それによって、大きく3つの研究成果を得ることができた。以下、それぞれについて詳述する。

(1)「現代における監視の特徴と身体的経験の変容について」

これは、主に の作業を通じて得られた研究成果である。具体的には、現在の監視が高度なコンピュータ技術に依拠し、オンライン上で収集された膨大な個人データによって行われているなかで、どのように国家や民間企業を含む権力構造や身体的な経験が変容しているのかについて明らかにした。さらに の作業の際には、学内の留学制度を利用してカナダ・クイーンズ大学へ留学していたこともあり、受け入れ先の教授や研究室の学生たちとの交流を通じて、隣接する研究分野であるグローバリゼーション研究やモビリティ研究における監視とそれともなう身体管理の議論についても学ぶ機会を得た。そのため、これらの視点も接合しながら、研究成果を

論文(「監視と移動の時代を生きる 身体は何を経験するのか」)にまとめた。これは、2019年にハーベスト社から出版された『応答する<移動と場所> 21世紀の社会を読み解く』に収録されている。

(2)「生体認証技術と優生思想の関係性について」

これは、主に と の作業を通じて得られた研究成果である。具体的には、「戦後日本の再編と身体管理の思想」の分析として、1920年代頃から日本で指紋への関心が、個人識別だけでなく、人類学、遺伝学、法医学の分野へと広がっていたこと、さらにその研究の中心的役割を果たした法医学者・古畑種基の研究関心の変遷を考察した。これにより、古畑は、日本における生体認証技術と優生思想との関係を考えるうえで、鍵を握る存在であり、彼の研究は戦後日本の優生学的思想にも影響力を持っていることが明らかになった。ここでの研究成果は、2019年のドイツ現代史学会で口頭発表をするとともに、2020年にドイツ現代史研究会の会誌『ゲシヒテ』にて、論文「生体認証技術と身体管理 識別・分類・意味づけの暴力」にまとめた。さらにこの研究によって、1920年代から戦後にかけて、指紋への関心は日本だけでなく、植民地においても存在していたことがわかってきた。この点については、本研究で得られた研究成果をもとに、日本帝国という広い文脈で議論を展開させていく必要があり、今後の研究課題にする予定である。

(3)「身体管理に内在する暴力について」

これは、 から の作業を接合することで得られた研究成果であり、本研究の中心的な課題である過去から現在における身体管理に内在する不可視化された暴力にかんする内容である。

具体的には、大きく分けて2つの研究成果があり、1つ目は、主に日本帝国における身体管理に焦点を当てながら現代との対比を行ったものである。このテーマに関心を持ってくれた海外の研究者仲間から英語の書籍として出版する誘いを受けたため、「Biometric Technologies and Mobilities: Controlling Workers and Citizens in Manchukuo」を執筆し、2022年にPalgrave Macmillanより出版された*Documenting Mobility in the Japanese Empire and Beyond*に収録された。

2つ目の研究成果は、現代に焦点を当てた内容であり、最終年度に2本の論文を執筆した。1つ目は、オンラインとオフラインが混ざり合う世界に生きる身体の経験の変化を、近代における身体管理の実践とその先にあった優生政策を参照しながら、分析したものである。現代の身体管理は膨大なデジタルデータの解析に依拠しており、その新しさに注目が集まるが、歴史的な視座から考察することで、人びとを分類し、選別し、価値づける実践が根強く存在し続けている点を明らかにした。2つ目は、主に監視資本主義が生み出す現代の身体管理に着目し、「未来を知るために個人を意味づける」実践が、次第に「個人の意思を誘導・操作する」実践に向かっている実態と、そこに内在する暴力について論じたものである。両者はともに、書籍(分担執筆)として出版する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 高野麻子	4. 巻 13
2. 論文標題 生体認証技術と身体管理 識別・分類・意味づけの暴力をめぐって	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ゲンヒテ	6. 最初と最後の頁 55 64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高野麻子	4. 巻 47
2. 論文標題 生体認証技術の発展と未来ー認証される「私」とは誰なのか	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 世界思想	6. 最初と最後の頁 66 70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 5件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 高野麻子
2. 発表標題 生体認証技術による身体管理と統治の歴史の変遷
3. 学会等名 地域の法と政治研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高野麻子
2. 発表標題 行政による生体認証技術の利用とその歴史
3. 学会等名 日本行政学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高野麻子
2. 発表標題 生体認証技術と身体管理：識別・分類・意味づけの暴力をめぐる
3. 学会等名 ドイツ現代史学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Asako Takano（高野麻子）and Midori Ogasawara
2. 発表標題 Identification Technologies and Mobilities: How Colonial Japan Watched Over Chinese Workers Using Fingerprints
3. 学会等名 Surveillance Studies Centre Seminar Series（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Asako Takano（高野麻子）and Midori Ogasawara
2. 発表標題 Identification Technologies and Biometric Power: A Transition from Occupied China to Post-World War Japan
3. 学会等名 The Munk School of Global Affairs and Public Policy（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 伊豫谷登士翁、テッサ・モーリス＝スズキ、吉原直樹、飯笹佐代子、伊藤美登里、辛島理人、笹島秀晃、高野麻子、高橋雅也、武内進一、松本行真、望月美希、山岡健次郎、山脇千賀子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ハーベスト社	5. 総ページ数 268
3. 書名 応答する〈移動と場所〉 21世紀の社会を読み解く	

1. 著者名 Takahiro Yamamoto, Catherine L. Phipps, Liang Wu, Stefanie Affeldt, Hiroaki Matsusaka, Asako Takano, Jihyun Na, Sherzod Muminov	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Palgrave Macmillan	5. 総ページ数 285
3. 書名 Documenting Mobility in the Japanese Empire and Beyond	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------